

エコー検査待ちに関する検査室での取り組み

◎猪俣 朋花¹⁾、谷口 咲希¹⁾、清水 美希¹⁾、伊藤 大佑¹⁾、尾崎 典子¹⁾、藤田 恭代¹⁾、早川 誠¹⁾、山田 明¹⁾
独立行政法人地域医療機能推進機構 徳山中央病院¹⁾

【取り組み】

当院生理検査室では、エコー検査までの時間を待ち合いで待つしかなく、待ち時間が長時間に及んだ場合、患者さんの不安につながると考えた。そこで、エコー検査の待ち時間が受付の時点で30分を超えると予測される時、以下の3つの選択肢を提示し、患者さんに選んでいただくようにした。

- ①そのまま待ち合いでお待ちいただく
- ②指定した時間に検査室受付に戻ってきていただく
- ③順番が近づいたら検査室から患者さんに電話連絡を行う患者さんの意見を伺うため、②、③を選んだ患者14名にアンケートを行い、今回の取り組みについての意見と、検査室に戻ってから検査が始まるまでの待ち時間を調査した。

【結果】

今回の取り組みについて、「ア：いい方法だと思う」が9名、「イ：いい方法とは言い切れない」が2名、「ウ：どちらともいえない」が3名であった。アを選んだ患者さんからは、他の場所で時間をつぶせるので良い等の意見が

あった。イ、ウを選んだ患者さんからは、体調が良くない場合どこかに行くのも大変である等の意見が挙げられた。また、検査室に戻ってから検査が始まるまでの待ち時間は、0～30分が12名、30～60分が2名であった。

【考察】

院内の自由な場所でエコー検査を待ついただくことで、待ち合いの密を減らすことができた。また、約65%の患者さんが今回の取り組みに肯定的な意見であった。検査室に戻ってから検査が始まるまでの時間が30～60分であった患者2名は、いずれも②を希望した患者さんだが、指定時間より早く戻ってくることがあったため、③の方が待ち合いでお待ちいただく時間を短くできると考えられる。今後はアンケートの回答数を増やすことで、より多くの患者さんの意見を反映させていきたい。

【結語】

検査待ちに対する取り組みは、患者さんの選択肢を増やすことができ、有用であった。

当院における超音波検査の業務改革の取組み

◎山村 展央¹⁾、日出山 健¹⁾、古森 健太郎¹⁾、笠村 竜也¹⁾、袋瀬 大輔¹⁾、笠村 知春¹⁾、池田 かおり¹⁾、清家 忍¹⁾
市立八幡浜総合病院¹⁾

【はじめに】

多くの臨床検査室が IT や検査機器の発展に伴う業務の効率化や業務拡大に伴う編制、そして昨今のコロナ禍等の影響を受け、運用面の改革や新しい取組みを行う中で、その存在意義を高めていると思われる。また近年では、医師や看護師の働き方改革に伴うタスクシフト推進等の影響により更なる運用面の改革が望まれている。

当科は愛媛県南予北部の急性期中核病院である。長年対応してきた超音波検査業務の 24 時間対応と近年の取組みとして、入院患者におけるベッドサイド超音波検査について、現状とその効果、課題について報告する。

【取組み①】

約 18 年前から超音波検査業務の 24 時間対応を行っている。夜間休日の検査件数はこの 10 年間は年 350 件前後で安定している。超音波検査業務のスキルアップや人材育成には欠かせない業務であり、臨床医との信頼関係を構築できる数少ない業務である。課題としては、全領域に対応できる技師の育成と人員確保、心身への負担等が挙げられる。

【取組み②】

コロナ禍の猛威を受け、検査室や病棟スタッフの人員減少を余儀なくされた時期に、生理機能検査室で行うことが多かった超音波検査をベッドサイド検査へ積極的に移行した。その結果、検査時間の短縮・効率化に繋がり、有効活用できる時間が増加した。また病棟内でのあらゆる状況下での検査は「取組み①」とリンクし、検査スキルを向上させている。病棟の検査出し業務は軽減し、病棟業務の効率化にも寄与している。課題としては、病室内での異なる検査環境への対応等が挙げられる。

【まとめ】

今後、医師や看護師の働き方改革、各職種におけるタスクシフト/シェアが進む中で、現状業務の拡充も求められることが予想される。できることからの積極的な取組みが臨床検査室の価値を高めるものと考え。

連絡先 0894-22-3211